

あった。しかし、アテナイからの客人が「神々について正しい考えを持ちながら立派に生きるか、それとも、その反対の生き方をするか」が何より重要と呼びかけるように、宇宙論的規模の神や魂の存在をめぐる議論は生のあり方にも深く結びついていだけではなく、魂が倫理的な側面も含めた全ての運動や変化の始源である以上（同じく後期著作の『ティマイオス』では神たる宇宙と照応関係にあることがより強調される）、個々人の魂のあり方が立派な生か不正な生か左右していくこととなる。ここに初期以来の「魂に配慮して善く生きよ」というテーマを見いだすのは困難ではないが、『法律』では年上の立法者が若者を教え導くことで正しい生を実現していくという側面も表れている。不敬度という誤った知を持った者を説得し正しい生き方に導くというモチーフは、無神論への反駁を承けて続く神義論的な議論、すなわち無関心説や買収可能説への反論において繰り返されていく。

魂や神をめぐる『法律』第一〇巻の所論は、善き魂として世界を統治する神といった宇宙論的なスケールを背景としつつ、神々に関する正しい知を持つて善く生きるべく個人の魂も向き変えていくというものである。また、神義論の問題も含めていくと、その過程は年長の立法者が若者を教導していくだけでなく、正しい魂となる、すなわち善き生の実現を神々が守護し助力するものでもあった。このように、『法律』第一〇巻における魂をめぐる議論が、哲学的側面だけでなく、いわば「他力」的な救済という宗教的側面も持っていることは、特徴的な論点となつていると考えられる。

プロティノス哲学体系にみられる愛の階梯

堀江 聡

新プラトン主義の一応の出発点プロティノス（紀元後二〇五—二七〇）が、主題として愛（エロース）を採りあげた作品は、第五十論攷「愛について」である。この論攷では、愛は情念（パトス）として以上に、神として、ダイモンとして捉えられる。それは、古代ギリシアの通念や神話語りを反映し、とりわけプラトン対話篇の所説を尊重するからに他ならない。したがって、愛は現代の我々の常識を遙かに越えた拡がりへと展開する。愛には、単純な積み重ねという構成ではないが、少なくとも七階梯は認められる。

まず、手近なところから始めると、われわれの魂の愛には三種類ある。原型たる知性界の美を忘却せず保持している場合、純粹愛といわれる。知性界の美を想起せず、似像たる感性界の美を現像と取り違える場合ですら、知性界への愛は顕在化せずとも存続し、あらゆる愛の動因にはいる。ただ、知性界の美の観照に不足し、その欠を補填するために実践に転ずる。つまり、美しいものを自ら産んで、その美を観照するという廻り道をとるのである。産むこと自体、可死的なものの連鎖の果てに、一種の美である不死性を仰望する行為であるが、美しいものを産むために美しいものにおいて産むことを欲求する。したがって、美しい産み手への愛という、本来の愛とは別の愛が

第2部会

純粹愛に混じり、混合愛となる。この両者はまだ自然的な愛であるが、三番目として反自然的な愛がある。これは美しいものを産み出す欲求すら欠く場合であり、愛の片鱗は動因として残るものの、何も産み出さない醜いもの醜いことに向かう倒錯的愛といえる。

プラトンによれば、アフロディテーには二種類あるから、その子エロースも二種類に分けられることになる。一方のアフロディテーは、ウーラノスの孫にしてクロノスの娘で感性界から離存的な根源魂に相当するものであり、他方は、ゼウスとディオネーの娘で、この地の結婚に関与する宇宙魂に当たる。前者のエロースは、父クロノス、ひいては祖父ウーラノスへと絶えず希求を向ける上方志向ゆえに神であるとされる。だが、後者のエロースには、感性界の差配のために、当然下方への眼差しもそなわってくる。前述の個別魂の場合、自然にかなった愛はダイモーンであるが、自然に反した愛は情念に墮する。個別魂が根源魂のうちに含まれているように、ダイモーンとしての個別のエロースは、全体的エロースに包摂されるという。したがって諸々の個別魂は、善美への希求において一点に収斂してゆくのであり、個別魂が相互に離在しているという通念は正されねばならない。

第三十八論攷によれば、知性には知性対象を直知する活動と同時に、いわゆる一者を直知せんとする活動があり、前者が「素面の知性」の顔であるのに対し、後者は「ネクタルに酔える知性」「愛する知性」といわれる。一者が一切の限定を絶した無限者であるからには、無限者を愛する知性の愛も無限とな

るはずである。

最後に第三十九論攷をみると、一者をめぐって、自己を愛する愛と表現する定式に遭遇する。一者は自己原因であるから、自己の美しさを創ったのも一者自身に他ならない。したがって、神は愛すべき美しいものであり、愛する主体でもある。その愛は、愛の対象が前提されてのちに成立するものではなく、逆に、この愛のほう为爱の対象を熱烈に望んで存立させたのである。

こうして、プロティノスの階層的哲学体系は、通常さほど指摘されないながらも、上から下まで徹頭徹尾、愛に貫かれているのであり、世界にあまねく播種されたしを通して神的愛の紐帯を説いたイアンブリコス（昨年の拙発表参照）と意外なほど遠くない位置に立っていることが判明した。

紀元後四―五世紀の歴史叙述における 「過てる哲人王」ユリアヌス

中西 恭子

紀元後四―五世紀の歴史叙述におけるユリアヌス像は「異教徒」の英雄または「迫害者の再来」としての側面を備えている。ユリアヌスの崇拜者として知られるアンミアヌス・マルケリヌスとエウナピオスは可能な限り「文人皇帝」の宗教実践を善意に解釈しようと試み、アキレイアのルフイーヌス、フィ